

## 忘れられた叡智を求めて

第10回

**福**島原子力発電所の事故は、原子力の安全思想に、何を投げかけたか。

かつて、原子力の安全研究の道歩んだ一人の人間として、考えを述べておこう。

この事故は、人類の歴史上前例の無い、全く未経験の原子力事故であり、それゆえ、原子力の安全思想に、根本的な「三つのパラダイム転換」を迫っている。

第一が、「想定内危機」から「想定外危機」へのパラダイム転換。

今回の事故は、地震の規模や津波の高さを例にとっても、安全設計と安全審査において「想定」されていたものを、大きく上回っている。そして、従来の「経験」と「想定」を超えた天災地変が頻繁に起こるといふ、近年の「地

## 新たな叡智が求められる 原子力の安全思想

球環境の異変」を考えるならば、これからは、従来「想定外」であった天災地変も「想定内」として考慮するという安全思想が求められるようになる。

第二は、「単発的危機」から「複合的危機」へのパラダイム転換。

今回の事故は、「一つの原発事故が起こった」という意味での「単発的危機」ではなく、「大地震」「大津波」「原発事故」が同時に起こったという意味での「複合的危機」であり、さらに、「複数の原子炉」が同時に事故を起こしたという意味での「複合的危機」でもあった。

そして、こうした「複合的危機」が現実を生じたということ、さらに、それが「複合的危機」であったがゆえに、

事故対策が極めて困難な状況に陥ったということを考えるならば、これからは、「複合的危機」が生じることを前提とした安全思想が求められるようになる。

第三は、「短期的危機」から「継続的危機」へのパラダイム転換。

福島事故と比較して語られるスリーマイル島事故やチェルノブイリ事故は、実は、事故そのものは一週間から十日間で収束している。しかし、この福島事故は、現在も不安定な状態が継続しており、収束までに半年以上を要すると予想されている。

すなわち、スリーマイル島事故もチェルノブイリ事故も、事故そのものは「短期的事故」であったが、福島事故は「継続的事故」と呼ぶべき

状況になっており、この前例の無い状況が、様々な新たな問題を突き付けている。

例えば、原子力事故における対策行動の国際的指針を示している「国際放射線防護委員会勧告」は、基本的に、こうした「継続的事故」が発生することを想定していない。そのため、本来、短期間の措置として定められている「避難区域」の設定や実施においても、極めて難しい問題を行政府当局に突き付けたといえよう。従って、これからは、こうした「継続的危機」が生じた場合の安全思想が求められるようになる。

では、この三つの意味における「新たな安全思想」を、我々は、生み出せるのか。

福島原発事故は、我々に、その叡智を深く問うている。



田坂広志

[内閣官房参与  
多摩大学大学院教授]